

## 私達のために貧しくなられた イエス様の愛に応えて

Ⅱコリント8章1～15節

2021年10月17日

松田 基子 師

新型コロナウイルス感染の第5波が、治まりつつありますが、これで終息する事はないと言われていています。第6波への備えが考えられています。この2年間感染防止対策で一番求められた事は、3密回避で、密閉、密集、密接を避けることでした。できる限り、仕事はリモートワーク、様々な会議、講演などもオンラインで、と言うふう

に生活の仕方が大きく変化しました。その事によって、情報技術の進化は目覚ましいもですが、一方、人間の関係性が希薄になり、世の中は一層、個人主義化して、自分の守りを固める自己中心性が強くなっている事が、懸念されています。

聖書は、神様が天地万物を創造されたことを教え、その中で、人間は、関係性の中で生きる様にお造りになったことを教えています。人間は一人では生きられないものです。何よりも、

『造り主である神様と結ばれ、聴き従う  
関係を築いて、人と人とは互いを**尊び**、  
**助け合う関係**に生きる様にと、その御心  
を込めて世に送り出されています。』

その御心に従うことが、人を幸せにするのです。人間は他者との関係を軽んじ、**自己中心**に生きたなら、**幸せになれないように造られています**。神様を信じたとき、その事を先ず、知るべきです。使徒パウロは、イエス様と結ばれ、イエス様との関係に生き始めた時に、人との関係、特に同信の友の様々な問題を、見過ごしにすることは出来ず、支援の手を伸べて信徒間の関係を繋いでいきました。その一つが、エルサレム教会の窮乏に対する支援の輪を広げて、主イエス・キリストの身体である教会の一体感を築いて行くことでした。

そのきっかけになったのは、紀元49年に開かれた使徒会議のために、エルサレム教会へ行っ

た時のことです。その時、パウロはエルサレム教会の窮乏を目の当たりにしました。エルサレムは、ユダヤ教の本山です。エルサレム神殿では盛んに宗教行事が行われ、人々は律法を守り、宗教行事に参加する事で、選民の誇りを持っていました。そのような中でキリスト者たちは

「十字架に架けられて、死んだあの、ナザレのイエス様は、神の御子で、人の罪を、負って身代わりの十字架にかかられたのです。その証明に復活されました。このお方を信じるなら、救われます。」

と証をしました。そのために周りからは危険視されて、

「こんな教えが、広まってはならない、彼らは神に背く者達だ。」

と言って排除され、攻撃迫害を受けました。

エルサレム自体が、ローマの圧制で貧しかったのに、キリスト者達は、人々から排除され、攻撃を受け、一層貧しさを強いられました。パウロはその様子を目の当たりにしては、とても見過ごす事は出来ませんでした。彼はエルサレム会議の後、第二伝道旅行に出発しています。彼はその時エルサレム教会の窮状を告げて、募金を頼んで歩きました。パウロの一行は紀元50年に小アジアを越えて、初めてヨーロッパに足を踏み入れました。それはパウロが、

「マケドニア州に渡ってきて、  
**私達を助けて下さい**」

と言う幻を見たことによります。

マケドニア州では、フィリピとテサロニケとベレアに教会が出来ました。この地方は曾て、アレクサンダー大王の出生地でもあり、とても栄えた所ですが、パウロが伝道した時代は、ローマ帝国の時代でしたから、ローマからの重税で苦しんでいました。パウロは貧しさと、キリスト者に向けられる非難、攻撃を受けているマケドニア州の信者たちには、募金の勧めはしなかったようです。

紀元51年、彼はマケドニア州から、南に向かい、コリントに伝道しました。1年半滞在して、

コリント教会を設立しましたが、コリント市は、街全体が貿易で潤う富豊かな都市でした。教会も当然、マケドニア州よりも豊かでした。パウロは彼らにエルサレム教会の支援を呼び掛けました。最初は皆、喜んで捧げました。しかし、この、コリント教会は、パウロが去った後、様々な問題が生じ、パウロを悩ませました。

パウロは第3回目の伝道旅行で、紀元55年、エフェソ滞在中に、「コリント人への手紙Ⅰ」を書いて、コリント教会の問題に答えました。

その時、コリント人への手紙Ⅰの16章1節で、  
「聖なる者達のための募金(エルサレム教会への献金)に付いては、わたしがガラテヤの諸教会に指示したように、あなた方も実行しなさい。わたしがそちらに着いてから、初めて募金が行われる事の無いように、週の初めの日にはいつも、各自収入に応じて、幾らかずつでも、手元にとって置きなさい」

と命じました。実はこの手紙、パウロは信徒達の霊的成長を求めて、率直に書いたのですが、パウロに反対する一部の信徒達の反感を買ってしまいました。反対者達は、パウロを非難し、パウロとコリント教会の信頼関係が壊されてしまいました。パウロは真実を分かって貰おうと、

『涙の書簡』

と呼ばれるものを書き送りました。その後テトスを送って、打開の道を求めました。その結果、パウロの祈りと愛、信仰がコリント教会の信徒達に分かって、彼らは悔い改め、信仰に立ち返ったのです。テトスはその報告をマケドニアにいたパウロの許に持ってきました。

そこで、パウロがもう一度書いた手紙が、コリント人への手紙Ⅱです。今朝の8章は、パウロのエルサレム教会支援献金に対して、反対者が12章16節で、

「悪賢くして、だまし盗った」

と言っていることに対して、信仰的な説明をしているところです。この時パウロは、コリントがあるアカイア州の北の、マケドニア州のフィリピ教会にいたであろうと言われています。

パウロは8章1節で、

「兄弟たち、(コリント教会のみなさん)マケドニ

ア州の諸教会(フィリピ、テサロニケ、ペレア)に与えられた神の恵みについて知らせましょう。」

と言っています。私達は、

「恵みが与えられた」

と聞けば、高価な物を得たとか、思いもかけない厚遇に浴したとか、輝かしい事を想像するのですが、2節を見ますと、

「彼らは苦しみによる激しい試練を受けていたのに、その満ち満ちた喜びと、極度の貧しさがあふれ出て、人に惜しまず施す豊かさとなった。」

と書かれています。詳訳聖書に依りますと、  
「激しい患難による試練のただ中であって、彼らの喜びの豊かさ、底をつく貧しさが一緒になって、彼らとして、惜しみなく施す富の洪水となって溢れたからです。」

と訳されています。

マケドニア地方は、全体的に貧しく、ローマの重税に喘いでいました。キリスト者はその上に、ギリシャの神々から決別したために、爪弾きにされ、攻撃をうけました。そうであれば、悲しんでいるのだらうと思うのですが、岩波訳では、

「患難に耐えるという、彼らの大いなる確証のうちに、」

と訳されています。彼らは最早、人を見ていません。主が共におられる、その確信と喜びに満ちています。彼らにとって、それは、物や安逸に優る祝福でした。すると、彼らの心には、感謝が満ち溢れ、何かをせずにはいられなくなったのです。

パウロはマケドニア伝道の初めから、貧しさの中にあつた、マケドニアの教会には、募金の要請はしなかったであろうと言われています。

ところがどこからか、パウロのエルサレム教会支援献金集めの情報が入ってきて、

「そんな事があるのなら、是非自分達も参加させて欲しい」

と懇願したのです。その純粋な神様への感謝は、少しの物惜しみも無く、施す富の洪水、感謝と喜びが溢れ出て、

『そうせずにはいられなくなった』

と言うのです。

その結果、彼らは、力に应じて、また、力以上に自分から進んで、自分の出来る精一杯を捧げました。それはパウロが期待した以上のものでした。マケドニアの信徒達の信仰は、人を見ないで、神様のみを見上げていました。彼らの純粋な信仰は、神様の守りを確信し、

『全ては神様のもの。命も神様のものであり、自分達は神様から、命とその全てをお預かりしているのだから、神様の必要に、お答えして行く。』

神様に示される通りに、従っていく所に、自分達の生きる目的があることを確信していました。

彼らにとって、一番大事なことは、神様との関係でした。ですから、

『先ず主に自分を捧げ、次ぎに神様の御心を示してくれるパウロに捧げる』

と言っています。即ちパウロが、エルサレム教会募金を、主の御心に従って行っていることに参加することでした。

さて、パウロがこの様に、マケドニア州諸教会の素晴らしさを誉めたのは、コリント教会が、その良き手本に刺激されて、この良き業を完成させて欲しいとの願いからでした。そこで、6節は、詳訳聖書に依りますと、

「それ程のことであったので、私達はテスに、それを始めたのが、彼であったので、あなた方コリント教会の間で、この憐れみ深い、恵み深い寄付を完成させる事もしなければならぬと勧めたのです。」

とあります。

パウロの第1の手紙で反発した人々によって、パウロが勧めたエルサレム教会支援献金は、滞っていました。パウロの涙の書簡で悔い改めた人々は、テスの勧めで、エルサレム支援献金を再開しました。パウロは今、再びテスを送って、その仕上げをしようと計画をしていたのです。パウロは7節で、コリント教会を励ましています。

「あなた方は、信仰、言葉、知識、あらゆる熱心、わたしたちから受ける愛など、すべて

の点で豊かなのですから、この慈善の業においても、豊かな者となりなさい。」

と勧めています。

パウロが、コリント教会の信徒に気付いて欲しいことは、

「イエス様の愛を思えば、愛が生まれる。」

ということです。9節に、

「あなた方は、主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は豊かであったのに、あなた方のために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです。」

と言っています。この言葉から、すぐに思い出される聖句は、フィリピ書2章6節からの、キリストの謙卑と言われる言葉です。

「キリストは神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」

とあります。

イエス様こそ、神の御子として、全宇宙の主として、栄光に満ちておられましたのに、人類を永遠の滅びから救うために、その全てを差し出して、全き人間になられ、その存在を与えて、罪を贖う十字架に架かり、神の子の命を与えられたのです。イエス様はそのように、ご自身を捨てて、最も貧しき者となり、その値の全てを人類に与え、ご自身を信じる者に、神の子の身分を与えて、キリスト者を最も豊かな者として下さったのです。その事を思えば、何でも喜んで与えられる筈です。でも、パウロは決してその事を強制しようとはしていません。

11節に、主の前に決心して始めたエルサレム教会支援献金ですから、

「今、それをやり遂げなさい。進んで実行しようと思ったとおりに、自分が持っているものでやり遂げることです。進んで行う気持があれば、持たないものではなく、持っているものに応じて、神に受け入れられるのです。」

と言っています。パウロはここで、支援献金だからと言って、

『自分の力以上に頑張らなくて良い。』  
と言っています。献金は他人と比較しない事です。Ⅱコリント9章7節に、

「各自、不承不承ではなく、強制されてでもなく、こうしようと心に決めたとおりにしなさい。喜んで与える人を神は愛してくださるからです。」

と勧めています。

一方困窮者支援で、時々聞く言葉は、  
「働かない人のために、」

と言う言葉です。パウロは8章13節で、  
「他の人々には楽をさせて、あなた方に苦勞をかけるということではなく、釣り合いが取れるようにするわけです。あなた方の現在のゆとりが、彼らの欠乏を補えば、いつか彼らのゆとりもあなたがたの欠乏を補うことになり、こうして釣り合いがとれるのです。」

と言っています。しかし、現実から見れば、エルサレム教会と、コリント教会の経済状態が、逆転するということは考えられませんでした。パウロが言っている釣り合いは、経済面を言っているわけではありません。

パウロはローマ書15章26節で、  
「マケドニア州とアカイア州の人々が、エルサレムの聖なる者たちの中の貧しい人々を援助することに喜んで同意したからです。彼らは喜んで同意しましたが、実はそうする義務もあるのです。異邦人はその人たちの霊的なものにあずかったのですから、肉のもので彼らを助ける義務があります。」

と言っています。支援献金をする者も、される者も、忘れては成らない大切なことは、

『全ては主のものです。』

パウロは荒れ野でのイスラエルの民の故事を思い起こさせています。

出エジプト記16章には、神様が、イスラエルの荒れ野放浪に、マナをもって養われたことが記されています。民は朝、地面を覆うマナをそれぞれ集めました。

「多く集めた者も、少ししか集められなかった

者も、後で量って見ますと、皆同じだったのです。」

これは、神様は、その人の必要に応じて、必要は必ずお与えになるということを示しています。15節に、

「多く集めた者も、余ることはなく、わずかしかなかった者も、不足することはなかった。」

と記されている通りです。ここに神様の采配は現されています。神様が養って下さるのです。しかし、神様はその手足として、私達人間をお用いになります。人間は互いに助け合う事無くして、生きては行かれないように造られています。私達に出来る事は、コップ一杯の水でしかありませんが、神様はそのことによって、人と人とが、愛を築いていく関係が、広まって行くことを求めておられます。

私達もわたしたちのために、貧しくなって下さったイエス様の愛に応えて、主に示されるものを、喜んで捧げて参りましょう。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様

私達を愛し、常に必要を満たして下さり、有難うございます。自己中心で握り占める心を砕き、イエス様の愛の目と心を与えて下さり、コップ一杯の水を更に捧げる者として下さい。

イエス様の愛が私達を通して、広がって行くことができますように、人と人との繋がりが、どうかイエス様の愛で、繋がって行きますように。この世界に、キリストの愛と平和を打ち立てて下さい。

尊い救い主イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。